やっぱりケースによって違うんじゃないかと。今回の場合は何しろまちなかのにぎわいっていうのは民間の皆さんの努力、熱意がないとこれできないことですので、そういった若い人たちが考えるということの真剣さっていいますか、それに国の支援を受けるということでありますので、まず出資するというふうに考えたところでございます。ご理解いただきたいと思います。

○蒲生光男委員長　14番、髙橋孝夫委員。

○１４番　髙橋孝夫委員　市長が今おっしゃられた中身っていうのは私理解できません。中心市街地活性化のいろんな事業あって、それを進めるためにっていう多分思惑もあるんでしょう。この前、産業・建設の協議会のときに言われたように、市がある程度出資をしているという、そういう会社であるならば経産省などからの補助も受けやすい、そういう土壌もつくるのだというお話がありました。確かにそうかもしれない。だけど、出資をしていく、それがオーケーというふうになるのはそれなりの手順と必要な情報公開がなければ判断できないでしょうと私は言ってるんですよ。それは最低これから残されたところで、ぎりぎり支出するまでの間、当局ができる限りのことはしてもらいたいんですよ。この示された中身でＡ４判１枚でこれでっていうふうに言われたって、これはやっぱり納得できないもの。誰がするんですかっていうのも明らかにならない。どこでするのって明らかにならない。規模は、わからない。それじゃあ、だめですよ。少なくてもわかってる範囲でこれだけ、これはこうだからというところは示して、その上で出資をする。そういう手順を踏んでもらいたいと思いますが、いかがでしょうか。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　ぜひ髙橋委員おっしゃるように、まず出資する前にＡ４、１枚ではやっぱりだめですよね。必ず出資者で概略はあるはずです、構想は。大きく変わるかもしれませんけども。少なくともそういったきちんとした事業構想でもいいですから、それを示していただいてやっぱり出資を支出するというときには慎重にしていかなきゃいけないと思います。

○蒲生光男委員長　14番、髙橋孝夫委員。

○１４番　髙橋孝夫委員　ぜひよろしくお願いします。

新たな質問に入りませんけども、温泉の関係では要望だけしておきます。

入湯税を活用して補助をしていくっていう考え方はわかります。反対してるわけではない。具体的なものをやっぱりきちっと２つの間で議論を進めてもらいたいということと、もう一つは要綱をちゃんと示していただきたいということだけ申し上げて質問を終わります。ありがとうございました。

○蒲生光男委員長　ここで暫時休憩いたします。再開は午後３時20分といたします。

午後　２時５９分　休憩
午後　３時１９分　再開

○蒲生光男委員長　休憩前に復し、会議を再開いたします。

なお、町田委員の質疑に際し、資料の配付について要望がありましたので、これを許可いたしましたので、お知らせをいたします。

町田義昭委員の総括質疑

○蒲生光男委員長　次に、順位３番、議席番号10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　お疲れさまでございます。私は、長井市のまちづくりが後世に負担の

少ないことを願いながら、予算総括質疑をさせていただきます。

時間を短くしようかなと思ったんですけども、このたびは長い時間をノルマとして与えられましたので、少し大変だなと、そのように思っております。少し最近感じたことを申し上げますけども、昨日ドイツの首相、メルケルさんですか。訪日がありました。最近、世界の要人が日本に来られた方の中であれほど存在感のある人はいなかったなと、私はそういうふうに感じております。皆さんはいかがでしょうか。

そのメルケル首相の話の中で、ドイツのエネルギー政策が将来にわたって原発の廃止ということをうたわれました。そのきっかけになったのはいつですか、どういうことですかという問いに対して、それは日本の東日本大震災のことがすごく影響したと。それをきっかけとしてドイツは脱原発という方向に転換したんですということでありました。安心・安全の国づくりをベースとした方向に転換されたんだなと、そういうふうに理解をしております。

一方で、我が国におきましては、原発の再稼働という方向で急速に加速をしております。産業の発展を中心とした国づくりの方向なのではないかなと、そのように思います。どちらがいいとか悪いとかさらさら申し上げるわけでございませんけども、やはり時のリーダーの考えというものは非常に重いんだなということを痛感しております。内谷市政におかれましても、これから４年間のスタートの１年目でありますので、幸せなまちづくりに最大の力を注いでいただきたいと、そのように期待をする考えでございます。よろしくお願いします。

６次産業の推進ということで質問させていただきたいと思いました。というのは、今回は私にとりまして４年最後の議会でありますので、私的に非常に忙しい状況でありましたので、質問は一般質問も予算総括もないなと思っておったんですけども、ちょうど開会日の新聞に６次産業の食産業成長の策を探るということで、長井が６次産業化推進協議会が発足したというものが掲載されましたので、あっ、これはすごいことだなと、私はそういうふうに思いました。ようやく立ち上げてくれたんだな、あるいは立ち上げる気になったんだなと、そういうふうに思いまして、これは少し当局の考えをお聞きしておかなければならないなと、そういうふうに思った次第でございます。

私はこのテーマにつきましては、２回ほど一般質問あるいは予算総括の中でさらっと質問した経過がございまして、特に厳しい口調で申し上げたような記憶がありまして、レインボープランの関係の皆さんからはおしかりを受けたというような経過がございまして、やはり今までは市長は施政方針の中で６次産業を推進していくと。あわせてブランド化を目指していくと。その中心になる組織は一体何だということになったときに、レインボープランを中心にした組織体制というものをずうっと言ってこられたわけですね。しかしながら、私はレインボープランの協議会を中心にした組織ではなかなかうまくいかない、あるいは前進をしないのではないかというような質問をした経過がございます。それに対して市長は、そうではないんだと。とにかくレインボープランというものは長井市の市政の柱でありますので、そういうものを中心として推し進めていってもらいたいと、また推し進めていくというような答弁があったわけで、その後、私は正直な話、具体的な６次産業化、６次産業の新商品の開発とかブランド化というものはそんなに多くは望めないんじゃないかなというふうに思っておりました。しかしながら、今回こういう組織ができたということについて、なぜこの協議会が発足した、協議会が必要だったのか。また、今までの協議会では目的達成は不十分だったのかということについて、市長か

らお伺いするものでございます。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　お答えいたします。

私の記憶違いだったら申しわけないんですが、６次産業化の推進についてレインボープラン協議会を中核に据えるということではなくて、ブランド化についてはいわゆるレインボーの里からというブランドなどを設けながら、栄養価の高い、そしてより低農薬、有機栽培に近いような、そういったものということでは言ってきたつもりだったんですが、農業の６次産業化については進めたいということは言っておりましたが、その核という組織はなかったというふうに思っております。

今回25年度中ではございますが、昨年の１月だったと思いますが、県のほうで「食産業王国やまがた」ということで吉村知事が６次産業化戦略推進本部の本部長になって、私ども35の市町村長が副本部長になって、これを推進していこうという協議会が県全体の戦略本部が立ち上がりました。その後、我々各市町村でそれを立ち上げようということで、その場では決定されたわけですけれども、残念ながら市町村の動きはかなり鈍くて、まずは県の４つの総合支庁っていいますか、そちらのほうで立ち上げたと。26年度に入りましてから町のほうで２つ、３つぐらい立ち上がっただけでまだ立ち上がっておりませんでしたので、これはいち早く立ち上げなきゃいけないと考えておりました。

そういった中で、６次産業化っていうのは言われてますが、やっぱりその担い手っていいますか、中核になる団体とか個人の方々っていうのは長井市の場合はばらばらでございましたので、その横の連携をとる、あるいはお互いに農産物の直売所とあと加工なさってるところとそれから農家レストランなさってるところ、いろいろな取り組みがここ二、三年でいろいろ出てまいりましたので、ぜひここは一堂に会してまず情報交換しようということで、本当に26年度の末でございましたけれども、先月、対策本部を立ち上げてまずは情報交換、意見交換を行ったということでございます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　市長から説明をいただいたわけでありますけども、私の記憶違いなのかなと、その辺は市長も記憶してない、私も記憶してないというようなことで、いずれにしても立ち上げたと、立ち上げていただいたということはそれなりのやっぱり評価をしたいなとは思いますし、やはり今行政の３つの大きな課題というと、マスコミを通して全ての自治体がまず観光の振興ですよね。そして６次産業化の推進、そしてあわせて少子化あるいは介護関係を重点施策に持ってくると。

特に６次産業化というものに対しては、これは別に農業の分野にもちろん限ったわけでございませんので、激しい競争の中で闘ってやはり生き延びていかなきゃいけないし、そこをクリアしなければ産業として生き残れないということでありますので、どこが主体になるとか、いろんなことはないと思うんですけども、やはり本腰を入れてこれを推進していってほしいなと、そういうふうに考えたわけでございます。

そういう状況の中で、農林課長にお聞きしますけれども、この組織のメンバーをいただきましたけれども、いろんな範囲ってあるわけですね。いろんな組織を網羅した中でこの19あるいは20の団体を選ばれたのか。あるいは最初から組織的には20ぐらいなものが必要だから20カ所を選ばれたのか。その点についてどちらなのかなというふうに考えておりますので、その点についてお聞かせください。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　６次産業化につきましては、もちろん１次の生産者、２次の加工業者、あるいは３次の販売業者というようなことで、この

３つの団体からやっぱり考えていく必要があるだろうというふうなことで、いろいろ現在取り組んでいる生産者の方々、そして具体的にそういった農産物を利用して加工してる方、あるいは飲食店等でメニューとして市内で提供していただいてる方々、さらには最近は雇用創造協議会のほうでも商品開発とかいろんなやってますので、それらの方々にお集まりいただいて、長井市の１本の組織としてそこで相互の連携調整を図りながら、６次化に向けて取り組んでいきたいというふうなことで検討した結果、こういったメンバーになったところでございます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　そうしたときに、今19の組織のメンバーがあるわけでございますけども、やはりもう少しこういう団体あるいは組織の人に参加していただいたほうがよろしいのでないかとか、そういう話が途中から出てくるということもなきにしもあらずだと思いますけれども、そういう状況の場合は臨機応変に対応していくという考えでよろしいんですか。それとも固定してこのメンバーで何年かは推し進めていくというふうな考えですか。どちらでしょうか。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　これから本格的な協議をしていただくわけでありますけども、その中でこういう方々も入っていただいたほうがいいんでないかとか、こういう方々と連携するとまた別な商品が生まれるんでないかとか、そういうふうな議論が今後出てくるかと思いますので、そういった際はそういった方々にもやっぱり参画いただきながら、組織を強化しながら進めてまいりたいというふうに考えております。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　ありがとうございます。

そういう状況の中で、この組織のメンバー見させていただいたわけで、どこが主体になってやっていこうとしてるのかなというふうに今考えておったんですけれども、地場産業振興センターが６次産業化推進部長という役職がついているわけで、ここが主体になって推し進めていくという理解をしてよろしいんでしょうか。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　６次化につきましては、非常に幅広いということで考えておりまして、農産物の生産・加工、さらにはグリーンツーリズムとかいろんな部分があるのでないかなというふうに考えております。また、今回の委員の方々についてはそれぞれレストランを経営されてるとか、飲食店をなさってるとか、実際に実践をなさってる方々でございまして、それぞれのこういったことで交流を図っていったほうがいいんじゃないかということになれば、それぞれの方々が実践の主体となっていただいて取り組んでいただくというようなことで考えておりまして、この推進協議会そのもので主体的に取り組むということではなくて、協議をしながらお互いに連携を図って自分にできるところについてはその組織でやっていただくと。また、逆に市の支援等が必要な場合は市が支援をしていくというふうな形で進めていきたいというふうなことで考えております。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　ここで市長にお聞きしますけども、今、農林課長が言われたとおり、そのエリア、エリアのいわゆるプロが集まった集団でありますので、それをやっぱり超越したリーダーシップというものも必要なのではないかなと考えるんでありますけども、この点についてやっぱり行政がそうした既存の組織を網羅して引っ張っていくとか、あるいは推し進めていくとか、そういう部分はあるんでしょうか。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　６次産業化についての担い手は行政ではありませんので、あくまでも農家であ

ったり農家のグループ、法人、農事組合法人とか、あるいは株式会社ということになるんだと思ってます。したがって、事務局は市のほうでさせていただいて、それはなぜかというと６次産業化のさまざまな支援制度が、これは農林水産関係あるいは経済産業関係、いわゆる国のほうの制度が充実しておりますので、情報交換しながら、例えばここに農協とか県の農業技術普及課入ってたり、あとは商工会議所入ってたり農協入ってたり、いろいろ公的団体も入ってるんですね。したがって、なぜそういうふうに入ってるかっていうと、情報交換して、あるいは例えばここで吉田製粉さんって個人名上げますけども、これはもう以前から米粉をやってたわけですけども、これをさらにニンニクを粉にして何かいろいろ使えないかとか、さまざまなアイデアがあるんですね。そうしますと、実際実践されている方たちがさらに新たな商品を開発していこうとか、あとは一緒になって販売戦略を練ろうとか、そういったときに私ども行政とか公的団体、そちらがいろいろな形で支援をすると。したがって、長井市がどうのこうのということでなくて、あくまでも担い手は農家とか民間の皆さんだと。この推進協議会っていうのはそれをもっともっと情報を、私どもも収集できる立場にありますんで、提供するなりあるいは一緒に視察をしたり、あと新商品の開発のためのさまざまな支援をしたり、そういったことをしながら長井市の６次産業化が振興して、そして農家とかそういう団体の皆さんの収益が上がって、なおかつ観光交流の場で長井の特産品を、あるいは直売所とかレストランに多くの方にご利用いただける、そんな姿を理想として進んでいこうという考え方でございます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　やはり民間の活力っていうのは非常に大事なわけで、これを主にしていくということは、当たり前といえば当たり前、しかしながら、難しいということも言えるかもしれませんので、やはり情報とアドバイスは行政のほうでも惜しみなくやってほしいなと、そのように思います。

農林課長にお聞きしますけれども、この組織ができたというようなことで、どれぐらいの予算がついてるのか、調べればわかるはずだったんですけども、調べるよりも聞いたほうが早いなと思いましたので、お願いします。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　26年度につきましては、本当に申しわけない程度なんですけども、６万7,000円ということで委員の方々の謝金ということで見ております。あと27年度の予算につきましては、20万3,000円というようなことで、３回ほど協議会を開催したいなというようなことで、これも委員の謝金と若干の旅費を見込んでいるところでございます。具体的な予算につきましては、いろんなアイデア等が出た段階でその対応ということで予算を組んでまいりたいというふうなことで考えてます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　26年度についての６万7,000円は論外としまして、27年に20万円という予算、３回の会議というようなことでありますけども、これでほんきこになって推し進めようとする金額なのかなと私は思ってるんですけども。この会議だけの組織で１年間終わってしまうというのは、その後のスケジュールはどうなっていますかということもあわせて聞くんですけども、これで１年間終わりますか。農林課長。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　今回の予算につきましては、３回の委員会の開催経費というふうなことでございますけれども、１回目につきましては26年度の２月の19日に初回ということで、現状と課題についてお話をいただいたところでございま

す。27年度の３回につきましては、１回目は商品開発の方向性について長井らしさや長井の新たな魅力づくりといった中での、ある程度方向性を協議いただきたいなと。あと２回目につきましては、さまざまな６次産業化や既存商品、既に開発している商品、そういったもののブラッシュアップなり、それをどこで販売するんだろうかとか、そういったものの議論を進めてまいりたいと。あと３回目につきましては、さまざまな６次産業化の具体的な事業展開、どういうふうな方向で具体的にじゃあ、動いていこうかというふうなことで３回目のほうは協議会を進めたいなというようなことで考えておりまして、その中で具体的に例えばイベントとか、何かやったほうがいいとか、また市のほうでいろいろなハード事業で何か施設が補助がないかとかいうふうな出れば、その時点で議会にお諮りしながら予算のほうを確保してまいりたいなというようなことで考えております。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　この予算化と１年間のスケジュールということについてなんですけども、やはり一つの組織がスタートするというときによどみない１年間の組織の姿というものが非常に大事でないのかなと私は思ってるんです。１回目の会議を終えて次の会議までもう忘れたころに会議が出るということでは、この組織の活力というものは私は上昇方向にはいかないだろうと。常にこの組織を生きているんだというような認識を組織の代表者の方にやっぱり植えつけるっておかしいんですけども、持ってもらうということについては、１年間のうちでやはり会議だけでなくて、研修とかそういうものもやっぱり大事なことになってくるんじゃないかなと。また、そういうものがあってこそ組織の充実というものが見えてくるんじゃないかなと思うんですけども、この点について市長はいかがでしょうか。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　大きく２つ、27年度の事業がちょっと不十分だというご指摘だと思いますが、２つ理由があります。まず、１つは、ちょっと私の指導力不足もあって職員が何をしたらいいかわからない。あとは情報は確かにペーパーとかネットなんかでも調べられるんですけども、じゃあ、果たして長井で６次産業化の推進協議会を立ち上げて何を目指すんだというのが、多分職員も描けなかったと思うんです。

あともう一つの至らなかった点としては、26年度の早い時期にこの協議会を立ち上げられればよかったんですが、やはり農政も本当ころころ変わりますし、それに翻弄されている事務局の農林課の職員の体制もあって、少し落ちついたやっぱり冬の時期じゃないとできなかったと。それをもう少し早くして例えば少なくとも夏ぐらいの時点でしておれば、皆さんの意見の、例えば今後どうするかということまでの話し合いができれば、27年度にそういったものが予算化、必要な事業を組めるんだと思うんですが、なかなか組めなかったと。正直なところ何をしたらいいのかよくわからないと。

そんなことだったもんですから、ぜひ27年度に３回組んでるっていうことなんですが、あんまりのんびりしないでできるだけ３回早くやると。その段階でいろいろな意見が出てきたらぜひ補正をお願いして、そこで事業を進めていく。スピード感も必要ですし、あとは今６次産業化というよりも、もう７次産業化も一緒に考えなきゃいけない。７次って何だっていうと、６次産業化で一番欠けてるのは、もちろんマーケティングしてどういうふうに売るかっていう販売戦略を一緒にやるんでしょうけども、そこが残念ながら非常に弱いと。ですから、そこの販売戦略の部分はプロとかの力を頼らざるを得ないんでしょうけども、それらについてやっぱり商品をつくる、あるいはマッチングして新たな何

か売り方を考えたときに、どういうふうにじゃあ、具体的にどのぐらいの売り上げが起きて、どこをターゲットとしてどういうふうに売っていくかというところも一緒にしないとだめだと思います。そういったところを27年度あたりにどういうふうにしてそれを構築するかなどの事業などもぜひ検討しなきゃいけないというふうに考えてます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　やはり今、市長が言われたとおり、何をしたらいいかわかんないっていうのはそのとおりだと私は思いますね。ちょうど１年前の私、予算総括だか一般質問だかで質問したわけでありますけども、東京ドームでやった日本の食の祭りというものに対して、職員の研修をしていただかないと始まらないんじゃないかというお話をやりとりさせていただいた記憶があるんですけども、やはり私たちも同じなんですけども、とにかく長井市内にいたんでは話にならない。この目で見てさわって味を見てとか、やっぱりそういうものが絶対必要だと、そのように思います。とにかく研修とか、そういうものは早いにこしたことないわけでございますので、金を惜しんではこの６次産業化というのはもう絶対に成功しないと私は言い切れると思いますけれども、その点について市長はいかがですか。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　町田委員おっしゃるように、やっぱり新たなものをつくっていくという事業っていうのは、本当に大変なエネルギーも要りますし、あと何でしょうかね、やっぱり学ばなきゃいけないと。それらについてぜひ27年度、当初ではちょっと予算化できなかったんですが、必要であればきちんと事業計画を立てて、その研修も含めた予算化等々について議会のほうにもお願いしてまいりたいというふうに思います。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　ぜひスピーディーな組織運営をやっていただきたいなと、そのように思います。

この項目の最後になるんですけども、やはりいろんな商品今、出てきているのを承知しているんですけども、そのエリアの中で食べ比べとか味比べとか、そういうことやっておられるなという理解をしてるんですけども、もっと市民に認知されるような新商品を提供すると、そういう場をぜひつくって、それをお祭りのようにしていけないものかなと私はそう思います。やはり市民に認知されないでほかの地域、あるいは都市の中心の人に認知されるということはちょっと考えにくいわけでね。

例えば去年のバーニックのあったんですね。あれはくまモン効果だと思いますけども、私もちょっと参加させてもらって正直言ってびっくりしましたね。あの親子連れの多さ。これは本当に竹田主幹もびっくりするように喜んでいましたけれども、ああいう姿にこの６次産業の組織が中心になって、何かお祭り好きなイベントを１年に１回でいいから、市民に参加していただいてできないものかなと、このように思っていますけれども、最初にこのことについて農林課長、いかがですか。

○蒲生光男委員長　孫田邦彦農林課長。

○孫田邦彦農林課長　今、町田委員おっしゃるように、６次産業化、新商品等につきましては、まず市民に認知されていくということが重要でありまして、いろんな直売所とか市内の飲食店で販売するなど、市民に評価をいただきながら、その評価によって改善をするべき部分は改善をして、完成度、認知度を高めていくというふうなことが必要ではないかなというふうに考えておりますし、またそれがある程度浸透しましたらば、やはり今おっしゃったようなイベントを開催しまして、地域内あるいは地域外にも情報発信をしていくということが必要だと考えてお

りますので、そういった方向で検討してまいりたいというふうに思ってます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　農林課長は非常に慎重な答弁をされたみたいでありますけども、私はすぐできる仕事だと思いますけどね。もうベースがあるわけですから、そういうものを網羅していろんな知恵を出していただいて、あとは頑張るのはやはり予算ですよ、それだけですよ。私そう思いますけども、その点について市長はいかがでしょうか。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　おっしゃるとおり、こういうのはやっぱり気合いでやらないとだめだと。したがって、やっぱり市で予算化して税金を使わせていただくという以上はしっかりとした目的と十分な計画性が必要なんですけれども、それだけでもだめだなと。ですから、既存のイベントと一緒にあわせて長井市の６次産業化祭り、ちょっと名前はかたいですけども、そこで一つの例として雇用創造協議会で開発した馬肉ラーメン肉まんとかって食べたことない人がほとんどだと思います。ですから、そういったものをやっぱりみんな食べることができるとか、そういったお祭りを例えば水まつりのときにするとか、黒獅子まつりにするとか、あとは秋の何か収穫祭とあわせてやるとか、そういったことなどは夏以降のやつは６月補正でもし認めていただければできるわけですし、そういったことも協議会つくったとしたらやはり検討していかなきゃいけないんじゃないかなというふうに思います。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　やはり市民が楽しいっていうことについては税金をつぎ込んでも何らおしかりは受けないだろうと、そのように私は思っております。やっぱり市民の理解を得られないものについてはいろんなことがあると思いますけども、市民を巻き込んだ行動というものは、別に６次産業だけでなくて非常に大事であって、また市民が一番喜ぶものでないかなと、そのように今思っております。よろしくお願いしたいと思います。

６次産業推進についてはこれぐらいにしまして、２番目の市政功労者の表彰ということについて質問をさせていただきます。

私も市政功労者の有資格者の１人でございまして、非常に質問するのがおこがましいなと思っておるんですけども、このことについてはどなたも質問をされていなかったということについて一度は言っておきたいなと、そのように思いましたので、よろしくご面倒いただきたいなと、そう思います。

この市政功労者の表彰については、いつ始まったかなんて全然わかりませんけども、この今までの経過等について説明をいただきたいと。特に記念品とお祝い金、そこのところは詳しく総務課長にお聞かせをいただきたいと、そのように思います。

○蒲生光男委員長　中井　晃総務課長。

○中井　晃総務課長　長井市表彰条例ですが、最初は昭和35年12月に制定をされております。昭和54年に現在の条例の内容に全面改定されておりまして、条例に基づきまして表彰が行われましたのは昭和37年度からでございました。表彰者には条例に基づきまして記念品または記念品代をお渡ししております。最初の表彰者に記念品といたしまして肖像画をお渡ししたことから、その後も引き続き肖像画が記念品として採用されております。当初、肖像画は長井市出身の渋谷円吉画伯の筆によるものでございました。その後は昭和43年から平成11年までは同じく長井市出身の小松金華画伯に肖像画作製をお願いしておりました。条例では記念品または記念品料となっておりましたので、受賞者の希望を受け、肖像画以外に九谷焼の花瓶、成島和久井窯のつぼ、または記念品代をお贈りしておりました。

小松画伯から肖像画制作の辞退があった後、１年だけ東京の有限会社に肖像画作製をお願いしましたが、平成13年度から19年度まで栃木県の肖像画家、益子学司氏に作製をお願いしてきました。この時期にありましても受賞者の希望に応じまして肖像画にかわり記念品代をお渡しをしております。平成20年度から現在の長沼孝三先生のレリーフ「愛の花輪」を記念品とさせていただいております。平成20年度からは記念品代の希望は特に聞いておりませんので、レリーフを受賞者の皆様方に差し上げております。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　肖像画とか、あるいはそれにかわる花瓶とか、選択ができたわけですよね、前には。私の記憶ではその後、写真と15万円、そのいずれかを選んでくださいという時期なかったんですか。総務課長、どうでしょうか。

○蒲生光男委員長　中井　晃総務課長。

○中井　晃総務課長　確かに条例上、記念品代というふうになっておりましたので、希望者の希望を受けまして肖像画ではなく記念品代として差し上げてた時期もございました。金額につきましては、年度ごとに年によりまして物価等の変動もございますので、必ずしも一律で15万円としてきたものではございません。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　15万円という限られた金額でないということは、どれぐらいの差があったんでしょうかね。100万円もやったの。

○蒲生光男委員長　中井　晃総務課長。

○中井　晃総務課長　もう当時の記録が必ずしも残っておりませんけれども、記念品代としまして当初のほうは物価的にさほど高くありませんでしたので、５万円前後の記念品代であったり、その後10万円程度の記念品代であったりというふうな経過がございまして、一番多いときで20万円ほどの記念品代として差し上げた記録がございました。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　やっぱり時代背景においていろいろ変わってきたんだなというふうに理解するわけでありますけども、私の記憶では行財政改革のときに一番大変なときに祝い金を休んでいただいたというような記憶があるんですけども、その点はどうでしょうかね、市長、お聞きします。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　町田委員おっしゃるように、平成20年からでしたので、当時はやっぱり予算を組むのも本当に精いっぱいで、地区長の手当をカットさせていただいたり、職員なども議員も私どももカットしたわけで、その際に金額ではなくて謝意をあらわすものとしてどういうものがふさわしいかという議論、議論っていいますか、内部で検討させていただきました。同時に県内の13市の市政功労者、市政功労者っていうのは長井市独自の考え方で、市政功労という言葉を必ずしも使ってないところもあるんですね。そちらを見てみますと、長井市みたいに肖像画っていうところは１カ所もありませんでした。あと金額も現金でっていうのはありませんでした。ほとんどがやっぱり記念品ということでお渡しして謝意をあらわしていたということだったもんですから、それで長井市の場合はどういったものがふさわしいかということでいろいろ検討したのが、現在の形になったということですが、これは町田委員おっしゃるように、行革という最初そこがきっかけですので、これは果たしてそれはどうなのかということをやっぱり議会の皆様とも含めて議論もしていかなきゃいけない時期に来たんではないかと考えてます。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　私も今の記念品が少ないとか多いとか、もうそういうことの議論をするつもりはさらさらございませんので、やっぱ

り行革の一つのあったというのがきっかけで今に至ってると。その間の考え方をどうするんだということをやはり議論する場が欲しいなと私は今まで思っておったわけで、やはり地区長さんの手当とか、あるいは敬老会の復活とか、いろんなことでやってこられたわけで、市政功労者の皆さんに対しては復活していないなんていう言葉使えないんですけども、変化はしてないということなわけで、どういうもんかなと。私はもらうほうですから、余り強くは言えないんで、本当に第三者に考えていただけることになるんでないかなと思うんですけども、祝い金を余りお金ではしてないというお話もあったんですけども、写真とお金を選択するという時期あったんですけど、そのときはやはりお金をいただいたほうがありがたいというお話も聞いたことがございます、その頂戴した人に。そんなこともありますし、今後、当局としてはどういう考えを持っていられるのか。具体的なことがもしあったらお話をいただきたいなと思います。

○蒲生光男委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　肖像画か記念品代かということですが、私が聞いておりますのは、肖像画はなかなか飾るところが、もう今住宅の事情も変わって天井が低いと。天井が低いところに、ちょっと絵のサイズが少し小さくなったようですが、昭和30年代、40年代、地元出身の画家がいたから多分肖像画ということだったと推測するんですが、でも引き続き評判がよかったということだと思います。その後も肖像画ということで描いてもらえる人を探して頼んでたと。ただそれでもやっぱり飾れないと。それで選んでいただくというような形になったというふうに聞いてます。ただし、それは記念品代のほうが、お金のほうがいいということもあるのかもしれませんが、私はこの市政功労者の謝意っていうのはお金じゃないだろうと。ですから、現金っていうのは余り私はすべきじゃないと思います。しかも100歳の敬老祝い金というのも本当に気持ちだけにしてるんですね。５万円です。したがって、市政功労者の方にお金で謝意をあらわすっていうのは、これは失礼だと私は思っておりますんで、ただし今までの慣例で肖像画ではちょっと難しいという判断された方にはその分ということで肖像画の費用をお渡ししたということだと思ってます。

今後なんですけども、実は平成20年度に今の形をさせてもらうときに、やっぱり原点に返って長井の市政功労者ですから、長井市のものをということでいろいろ考えたときに、非常にこれは苦労したんですけども、長沼孝三先生の今の作品を、非常に版権もあって、それを承諾いただくときにかなり大変でした。私も２回ぐらいお会いして、まずお願いして、やっと納得してもらったんですね。今のものは制作費はご存じのとおり、５万円ぐらいです、制作費は。ただ、文教の杜の関係者の方に聞くと、価値としては、今はオークションみたいなのがあるんですけども、20万円ぐらいは十分するだろうと、価値はあるんだそうです。長沼孝三先生のやっぱりそういう彫刻家のずうっと評価っていうのはあって、それでいくともうすごくこれは価値のあるものだということだそうです。ですから、制作費、あれ原価なわけですよね。版権もちょっと入ってますけども、それを例えばほかではそういったものはつくれないわけですし、今のままでいいのかは別として、それなりに結果としては価値あるものだと思ってます。ただし、気に病んでたのはやっぱり行革からその発想が最初出たと。それはいずれもう一回、内部だけじゃなくてどうするかということの検討などもいただかなきゃいけないのかなと考えていたところです。

○蒲生光男委員長　10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　私も行革から今の姿が始まったということがすごく気になっておって、

それならばいま一度議論をやっぱりするべきなのではないかなと。どういうふうにするということはちょっと別としまして、やっぱりその場を持つ、あるいは機会を持つということをぜひやっていただきたいなと、そんなように思いました。

特にことしは自治功労者がたくさんおりますので、よろしくお願いを申し上げたいなと、そんなふうに思った次第でございます。

時間ありますけれども、適切な答弁をいただきましたので、私の質問を終わりといたします。ありがとうございます。

散　　会

○蒲生光男委員長　本日の会議はこれをもって散会いたします。再開は17日10時といたします。ご協力ありがとうございました。

午後　４時０８分　散会